

開拓の群像(十二)

船木長治郎とサロマ湖のむかし



船木長治郎子供抱いている姿

開拓の言葉を聞くと、直ぐに頭に浮かぶのは、鋏を打ち振って、大地を耕すことだが、佐呂間町には、豊かな漁業資源があった上に尚、人工的に、養殖漁業に成功していることなど貴重な話が沢山ある。その中に、「佐呂間町、町史編纂委員」をしている船木長治郎の、執筆した「サロマ湖に生きて八〇年」がある。この本には、尊い海・湖の開拓体験それも、船木一族を始め、関係ある人達のこと、よく刻明に書かれています。ここに紙数の都合で、転載から外すに惜しいところが沢山ありますが、転載と言うより参考にしてこの本に掲載してみます。敬称を省きます。

船木長太郎は、大正二年二月二十七日富武士にて生れていますので、サロマ湖の開拓を語るには、父親の長治郎を語らなければならぬ。長太郎の兄弟のことは勿論だが。

父長治郎は、明治一四年に、秋田県増川でその父直治と、母ワサとの間に生れている。

長治郎は、父直治に連れられて天売島に働きに出たのが明治二三年頃と言うから、九歳のときからだ。この年頃から漁業の経験をしたなら、漁業についての感の働きは、充分な働きをすると思われる。

P一に、直治が事故で亡くなったのは、明治二五年三月二十七日、長治郎が一二歳の時であった。直治が死んでからは、一家の中心として、北海道に出稼ぎに来ては家族への仕送りに努力していた。

明治三四年に海軍に入り、三年間軍隊生活をしている。

除隊してから、春は天売島の鯨漁の春漁に、春漁終れば樺太に渡って働いた。

明治四〇年代に入って、天売島にも樺太にも行かず、地元の諸井と言う人と共同で、大謀網を準備して漁をして、結果は不運にも大不漁であった。経験不足でもあったし、経営についても、素人であったことが原因であったと、後年長治郎は話していた。

長治郎は、そのため負債の整理等で妻レンにも色々苦勞を掛けしたが、妻のレンはよくこの苦境を乗り切るに耐えてくれた。

そのうち、何とか長治郎は、北見の湧別村で、ホタテ漁の体験をし、このホタテ漁は、七月から九月までで、其の後は、鮭の大謀網の横山と言う人の漁場で十一月中旬まで働くことが出来たとき、サロマ湖はよいところだと

知った。横山の番屋は、サロマ湖の中央に位置した五里番屋であった。明治四四年に、床丹にも来て視察をした。床丹には漁師の小関と言う一戸と他にも一戸あった。本川丈八と言う人の小屋もあり、長治郎は、次の年家族を連れて、サロマ湖に来る決意を固めてサロマ湖を、永住の地とすることに決心をした。

長治郎は、大正三年の春三月の始め、家族を連れて北海道に移住することを家族の者に話したら、其の時五七歳になる養母が、この年になって、知らない土地にお前達について行ったら足手まといになるからと言って、北海道に行かないと言ったら。長治郎は、実の母に幼い時に亡くなられ、養母に育てられ一緒に暮らして三五年になるが、北海道に行つて、安心して養母を迎えることが出来るようになるまで、義弟の由治に養母のことを話したら、由治が、それなら喜んで母のことを引受けると言ってくれたので、養母を由治に預けて北海道に渡った。

北海道に渡って五年目に、由治から婆さんが亡くなったと知らせて来た。長治郎は、一年でも早く柵屋根の板囲いの家を建て、婆さんを迎えるつもりであったが、実現出来ないうちに、婆さんの亡くなったことを悔んだ。

話が少し前後するが、

富武士に、長治郎一家が来たときは、釜沸の、本川丈吉が明治四五年頃から鯨漁に来ていた。川が春になると、キュリ、チカが産卵のために、川底が見えない程上って来た。む

しろも塩もない時代で、浜の石の上に自然干しをし、乾燥すると集めて、干草をかけて雨露の予防をして食糧にした。

船木長治郎一家が、富武士に到着したときは、本川と言う人の使った三間程の拝み小屋があつた。本川も秋田県の人だったので、一応借りることにした。七月の末から蚊に悩まされて眠られず、草を焼いて子供達をかばつた。

秋の一〇月初め、長治郎は一〇坪程の堀立小屋を建てた。自然木の、柱になる木、垂木になる木と、それぞれの使い道に合せた木を切つて、骨組を造り、白樺の皮とヤチダモの皮で壁と屋根を造つた、入り口には、むしろを下げて外と内との仕切りにして、やっと雨風をよけるだけの、家らしいのが出来た。

家の内部の一部は土間として、踏み込み炉を作つて、奥は、土の上に枯れ草や笹を厚く敷き、その上にむしろを並べた。家の片隅には、炊事道具の桶や鍋二、三個置く台所のよくな場所も造つた。寒さの厳しい冬は、入口のむしろの下から長い枯木を炉にとどかせて、はじめの方から、燃えて行くだけ枯木を押し込み、喰べ物の煮炊き、焼きをし。夜は炎の光を灯火とした。

長治郎は、佐呂間に移住してからも、天売り島の、佐藤漁場の親方に、鯨漁の忙しいときは是非来てほしいと頼まれていたので、佐呂間で魚を獲つても金にならないので、現金収入を得るため天売島に出稼ぎに出かけた。そのような働きの中から、貯えも出来て、磯

舟も網も手に入り。サロマ湖で漁に力を入れることが出来るようになって、米・味噌・醤油も買うことが出来るようになった。

話が少し後に戻るが、長治郎が、天売島に出稼ぎの留守中に、妻のレンが、富武士に来て初めての出産をした。四男の長一郎である。三年余り富武士に、隣家もないこともあつて、そのお産の時は、覚悟を決めて、九歳の娘ヨシ子に鍋でお湯を沸かさせて、妻のレンは、自分で取り上げたのだった。

大正四年四月には、富武士にも入殖者が増えたため、学校設立の陳情の結果、佐呂間小学校の分校特別教授所が開設された。

長治郎の子供の姉のヨシ子は、秋田で一年生に入学していたが、修了しないまま富武士の学校のない所へ移住したため、弟の長蔵と共に一年生として入学した（開拓の草分けの人達にこのようなケースが多々あつた）。

当時、浜から学校まで約四キロあつて、その半分は、人の住んでいない山林であつた。その途中に、あの当時は有名な、免因事業の相川農場が開設されていた。

「サロマ湖に生きて八十年」の著者船木長太郎が、小学校に入学した時は大正八年で、一年生が一二名で、全校生徒が五七名となつていた。大正六年に五男、九年に六男が生まれた。これで子供が七人九人家族になつて、家を大きく、屋根は桎苺きの煙抜きの付いた家が出来た。

その頃、大正三年から七年頃までの間、陸軍の兵器省からの買い上げで、三八式歩兵銃の、銃床材にクルミの材が指定された。一寸分の材が二四銭で、この幌岩山は、クルミ材が非常に多く、国有林の中でも許可なく切り出しが出来るとあつて、富武士の開拓者は、一斉に山で働いた。勿論、長治郎も慣れない山仕事であつたが、皆んなの仲間に入つて山にクルミの木を切りに通つた。一日働くと二円から三円になつた。米が当時一俵四円位であつたから、クルミ材切り出しは相当よい収入だつた。

長治郎の近くにも、大正五年頃に、大川、高橋の二戸。大正七年に佐々木一二が店を出した。この人は各種の事業を手掛け功労の多い人だつた。

サロマ湖の漁業も、明治から大正時代は、天然資源相手の収穫だつた、カキ漁、ホタテ漁と話に聞けば、コンブ漁もあつたことが、漁業組合のビデオテープに記録されている。

このテープは、佐呂間町開基記念事業準備室長が、平成三年一月、色々調査に歩いてるとき、漁業組合の事務所に保管されていたのを借りて来たのを、私（徳永）は見せてもらった。それは、昔の活動写真のフィルムで撮影したものを、現在の、ビデオテープにダビングしたものでしょう。

船木長治郎の働き盛りのころが、それを見たらよくその時代が判る。その活動写真は、大正末期から昭和の初め頃と記るされていた。

(右付記として徳永)

大正一五年に、鑑沸沖合に、ホタテが大量発生した。大漁との試験結果から、入漁料川崎船一隻二百円とのことで、北海道はもちろん富山県、石川県まで入漁者二百五〇隻となった。当時鑑沸は五〇戸程の部落で、かき島村長とあだ名された工藤と言う人もいた。このホタテの大発生で鑑沸は一挙に五百戸に膨れ上った。ホタテ漁に来た船に乗組員は、一隻当たり、加工の人も合せて一三人から一五人もいたそうだ。

七月一〇日に解禁をしたら、ホタテが死んで予想の五〇パーセントも揚がらなかった。船木長治郎も一隻出漁したが漁がなく、欠損まではしなかったが、たしかに思惑が外れたのだった。料理屋が五軒も七軒も建つし、市街が一度に出来て、警察の駐在所も出来、小学校も出来た。

湧別側開口の問題

昭和四年に湖口が湧別側に出来た。それまでは、鑑沸側の湖口が कारणとして開いていたのが、秋には閉口したきりになった。湧別側の方が万年口になったことで、水の落差がなくなってしまう、鑑沸の湖口は開かず、六五年経った今も同じである。

当時、そのことによるサロマ湖の生物がどうなるか、漁業にどんな変化が生じるか、十分な調査もせず、ただ、湧別の漁業者は、船

の出入りが出来れば、とのみ考えていたようだった。湖口を開いた所は、国有地で何の許可も受けずの、ないしょでの、常呂郡と紋別郡の、郡境に口を開けて見ようと誰言うともなくやってしまった。だが秋の時節で、それまでの鑑沸のように閉じられてしまうかもと考えもしていたが、実際は、湖口は段々と大きくなってしまい、永久のものとなってしまったのだ。

このようになるための、四月一八日日没ごろになって、ようやく湧別側の通水の見通しがついたころ、急に南風が強くなり、湖内の波も高くなり時化模様になった。午後七時三〇分ごろにやっと水を通したが、水量が少くて果してこれが大きな湖口になるのかと思つた程であった。夜になって、南風と雨の大時化になった。翌朝になり湖口の中が二百メートルにもなつて流水が渦を巻いて恐ろしい程であった。

後の報告では、鑑沸も一八日に通水したのだが、水勢が例年より弱くて期待したような湖にはならなかった。

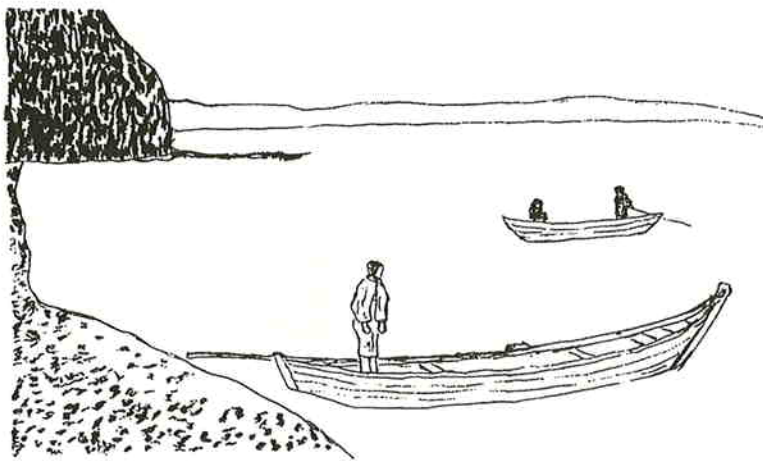
国有地を、無断で工事をしたため、警察も駄つて放つて置けなく、新湖口の工事の発起人が誰れなのか調べはじめたが、誰も口を塞いで話さなかった。(筆者の想像では、これだけの工事で結果は悪いことでないのだから、とことん警察は調査しなかったかもと考える。私見をここに書いてみた)。

「サロマ湖に生きて八十年」の著者、船木

長太郎の本の内容の中に、未だ未だ貴重なものの記事もあるが、始の題の様に、船木家一族の中に立派な成功者、社会的に大きく貢献した人大勢います中の、佐呂間の船木家の先祖、「船木長治郎」の一端を記しました。

サロマ湖は、益々の発展はここに記さなくとも皆さんの知るところです。

文責 徳永良行



大正時代の富武士の浜 (トレス画)